

46 馬王堆出土『五十二病方』にみられる薬の作り方の意義

遠藤 次郎¹⁾, 鈴木 達彦²⁾¹⁾東京都, ²⁾北里大学東洋医学総合研究所

先秦時代の著作と見られる馬王堆出土『五十二病方』は今日知られる医方書の中で最も古いものに属する。そのためか、本書に見られる薬の作り方は一見不可解のものが多い。本研究では薬の原義を追求する一環として、本書における薬の作り方を中心に再検討した。

- (1) 三湮汲水…水に泥を入れてかき混ぜ、静置して水と泥を分離する。また、かき混ぜて分離する。これを3回繰り返して得た上澄の水、と解される。
- (2) 井中泥…(1)と対立的な用例で、何度も水を上げ下げする井戸の中に沈殿した泥を薬として使う。
- (3) 三沸…生薬を煎じ、「沸騰したら火を止め静置する」を3度繰り返す。生薬や煎液を上げ下げしている点で(1)、(2)に類似する。
- (4) 三欧…「槐の木の根と枝と葉を三欧して煮る」等の例がみられる。「三欧」は「仍(ジョウ、重ねる)」の意味で、根と枝と葉を各々煎じ、煎液を1つに合わせて、それを再び煎じて服用する方法と推察される。葉、根、枝がそれぞれ天、地、人に相当する生薬であることから3つの煎液を合わせるという作業は天、地、人、三才を合体させる意味と推察される。これまで見てきた(1)、(3)における「三」も天地人三才を視野に入れた作業と考えられる。すなわち、(1)、(3)にあっては、水や泥や生薬を天地人三才の場の中で上下させ、大宇宙の力を得ようとする作業とみられる。
- (5) 滓…「滓」は日本では煎じた後の残渣を意味するが、原義は「水底に沈殿した泥」である。『五十二病方』の中では煎液と滓を同時に服用する例や、両者を別々に服用する例がみられることから、ここにおける滓は(2)の井中の泥と同じ意味を持つと考えられる。
- (6) 陳棄薬…古くなったむしろや動物の糞尿を用いる例も少なくない。(1)~(5)の例を考えあわせるならば、この陳棄薬も「泥」や「滓」としての意味を有すると解し得る。

以上示した『五十二病方』の薬の作り方と関連して興味深いのが『千金方』傷寒辟温に引用されている屠蘇の作り方である。「十二月晦日、日中懸沈井中(薬袋)、令至泥、正月作日平曉出薬、置酒中煎数沸……飲之……還滓置井中」。ここでの薬の作り方の中には、煎液ばかりでなく、井中の泥や煎液の滓までも登場している。屠蘇は晦日から正月にかけてつくられることを考え合わせると、この薬の作り方は、前年度の悪疫気を沈めて、新年度の清浄で乱れない気を得るように、天地人三才の力を薬に導入する作業であるとみなされる。

薬に大宇宙の力を導入するという方法は原始的な段階の薬の作り方に数多く見出されるが、『傷寒論』に近い例として、『千金方』傷寒例の華陀の治方があげられる。例えば、五苓散を服用した直後に多量の「新汲水」を無理やり飲ませ、発汗、吐、下(利尿)させている。すなわち、ここでの五苓散は体内の水をコントロールするのではなく、外界から導入した水の力をコントロールする目的で使われている。ここで、あえて「新汲水」とした理由は、新しく汲み上げた水は野性的な力が強く、この水の力を利用したためと推察される。「新汲水」に対立する位置にあるのが『傷寒論』にも見られる「甘爛水」である。この水は一名「労水」ともいわれ、何度となく水を上から注ぎ落とし、前もって水が暴れないように軟化させたものである。『傷寒論』では「奔豚」の病を治療するための処方煎じる時の水として使われている。

同じ傷寒温疫に対する処方でも、『傷寒論』の時代になると薬はもっぱら小宇宙を中心に処方が組まれるが、それ以前は屠蘇や華陀方の例の如く、大宇宙と小宇宙を連繋させた薬も使われていたことがわかる。『五十二病方』における(1)~(6)の薬も外界の天地人三才の力を利用した例と見ることができよう。